



<目次>

1	第8回総会を終えての思い	会長	早川 澄男
2	新年度を迎えて	ブロック代表	伊藤 善之
3	名大環境総合館「自走ぶるる」体験記	稲沢支部	安田 裕典
4	HUG講習会に参加して	大口支部	伊藤 金清
	机上のHUG講習を体験して	犬山支部	飯田 榮子
5	リバーサイドフェスティバルに参加して	一宮支部	岩田 和之
6	東海豪雨オープニングミニエクスカージョンに参加して	北名古屋支部	杉浦 緑
7	支部活動紹介	一宮支部	河村 文雄
8	防災よもやま話 28『現代社会の足元を考える』	名古屋大学大学院教授	福和 伸夫
9	お知らせ・掲示板		



**第8回定期総会が開催されました**

平成22年4月25日(日)午後1時半から、第8回あいち防災リーダー会定期総会が、名古屋大学環境総合館1階レクチャーホールにて開催されました。

来賓として福和伸夫 名古屋大学大学院教授、愛知県防災局危機管理課より熊田清文 課長・宇佐美主幹・石川主査・福田主任の4氏と、太田貴代子APLA相談役をお迎えし、本部役員・代議員合わせて69名の出席者により、議案のすべてが慎重に審議され、承認・可決されて、新年度のスタートを切りました。



## 1 第8回あいち防災リーダー会総会を終えての思い

あいち防災リーダー会 会長 早川 澄男

第8回あいち防災リーダー会の総会は、69名の参加を得て、議案書どおり承認をいただき、無事終了できたことをまずもって御礼申し上げます。

605名(3月末現在)の会員の皆様一人一人の総意を受けて、平成22年度も新役員一同 議案書に従い邁進いたします。

今年の大きな課題としては、

### 1) 命の大切さを伝え、命を守る活動として

耐震化アドバイザーとの連携による耐震化の啓発と耐震改修の推進

家具転倒防止啓発と実践活動

ガラス飛散防止フィルムの施工紹介と実践活動 を推進します。

### 2) また、他団体との連携により有事の際における連携活動体制を造ります。

昨年は、アレルギー支援ネット、名古屋レクリエーション協会、レスキューストックヤード及び桑名赤十字との連携による研修会と防災啓発支援参加をしてみいました。引き続きいろいろな団体と連携し支援参加してゆきます。

### 3) さらに重要な課題は、後継者や新しい人財の発掘と育成であります。

あいち防災リーダー会会員も年々増強(入替わり感)されているのは、各市町村で開催されている防災リーダー研修やあいち防災リーダー養成塾を修了した方々からの加入であり、各地域での皆様方のご支援のお陰であります。会員増強として、今年も第3回あいち防災リーダー養成塾を開講します。合わせて、高校生の人たちへの防災教育も進めて行きます。そのために高校や中学校へ企画提案を開始しております。

### 4) そして、各支部・地区で地域の自主防災の活性化支援です。

各ブロック間や本部との連携や相互支援体制で強化してまいりますので、ご要望や支援要請があれば、ご一報ください。

これらをまとめますと、平成22年度の活動のキーワードは、減災活動、連携及び人財育成と発掘です。そのためには、4月1日法人登録したあいち防災リーダー育成支援ネットと連携強化して進めます。

あいち防災リーダー会の益々の発展に寄与できるように頑張りますので、尚一層のご支援ご教授をよろしくお願いたします。





## 2 新年度を迎えて

西尾張ブロック代表 伊藤 善之

去る3月14日稲沢市総合文化センターにおいて、西尾張ブロック定期総会が30名の出席のもと開催され、議案書どおりご承認いただき誠にありがとうございました。

昨年度から、各支部で実施されるイベントや行事に、ブロックから人や資金の支援を行っており、支部間の交流が深まったと感じております。今年度も引き続きこの支援を継続していきます。

我々の活動は、自主防災会や学校などへの防災・減災活動、各種イベントでの防災・減災活動、自主防災リーダー研修や防災ボランティアコーディネーター講座への支援、耐震化支援・家具転倒防止支援、会員相互のレベルアップのための研修会など多岐に亘っております。その中でも次世代につなぐ人材育成が最も重要と考えます。皆様の支部で協議して、今年度重点的に推進する項目を決めて地道に進めていただくことをお願いします。

今年度の主な行事として8月29日午前、愛知県・一宮市総合防災訓練が一宮千秋総合運動場で行われます。APLAとして防災啓発を行ないますので、ブロックの皆様のご参加をお願いします。また9月26日午後、清須市で防災セミナーが群馬大学の片田教授を迎えて開催されます。この防災セミナーは防災リーダーのフォローアップ研修も兼ねていますので、こちらへのご参加もよろしくをお願いします。

## 3 名大環境総合館 「自走ぶるる」体験記

稲沢支部 安田 裕典



平成22年4月25日に第8回定期総会が行われましたが、それに先立ち午前中に名古屋大学環境総合館4階において、「自走ぶるる」の試乗体験をしましたのでその状況を報告いたします。

「自走ぶるる」は統合型地震応答体感環境「BiCUR I」と言われ、これは「Bi-directional shaker and Computed Ultra-Response Integration environment」の略で、研究室で開発されてきたもの

です。

地域防災力向上シミュレーター・各種実験教材・揺れの体感ツール（二次元長期ロングストローク振動台）など、すべてを統合化した統合型地震応答体感環境のニックネームです。

BiCUR Iの中核となる二次元長周期ロングストローク振動台の基本性能は、

- ・基本構成；上下2軸（水平2方向）サーボモーター、LMガイド、ボールねじ、ベルトにより構成され、上下個別に加震可能。
- ・重量；稼動部（上軸：1050kg、テーブル重量：70kg）積載重量；70kg



- ・制御；P Cによるモーションコントローラー制御
- ・加振性能（実験モード）

最大加速度；2 0 0 0 Gal

最大速度；4 m/sec(長辺方向)、1, 5 m/sec(短辺方向)

最大変位；± 1, 5 m(長辺方向) ± 0, 5 m(短辺方向)

以上で「自走ぶるる」の性能について説明いたしましたが、「自走ぶるる」の体験は護雅史（もりまさふみ）准教授の指導で、前半は阪神淡路大震災、後半は東南海地震の体験です。今までに経験した起震車「なまず号」に比して実際に近いものでした。しかし、移動車には手摺りがあり又予知がありますが、実際は何もなくこの地震が発生したら身の危険を感じます。何事も経験が大切だと痛感いたしました。最近の新聞に災害の心理学として避難を遅らす「正常性バイアス」についての記事がありました。チリ地震による津波で住民の避難が少なかったことに対して、危険性が直感できる訓練の必要性を訴えています。地震に対しても身の回りから確実に行うことが大切であると考えます。



#### 4 HUG講習会に参加して

大口支部 伊藤 金清

平成22年5月16日(日) 布袋ふれあい会館(江南市布袋支所)にて西尾張ブロック主催のHUG(避難所運営ゲーム)の講習会が開催され、大口防災救援グループから6名が参加しました。

・HUGの、Hとは避難所、Uとは運営、Gとはゲームの各頭文字で、HUGはハグと言います。ハグには抱きしめるという意味があるとのことで・・・

・受け付けのとき、カード入りの袋を受け取り、組分けを決める色紙があり、赤色の人とグループを作りました。アイスブレイキングに 氏名、最近の食べ物でうまかったもの(店) 災害体験を記入し、グループ内で各自発表しました。

・実技に入り、設定条件が 地震発生状況、から ~ までの説明を受け、避難所の平面図(学校の図面で建物等のすべてのものが記入され運動場には5メートル四方の升目が記入済みのもの)と、自動車・テント・自転車・・・等の記入寸法入り資料を受け取りました。

・そして250枚のカード入り箱が配置され、指導者の指示で一枚ごとに記入事項を確認して、どこに、どのように、配置または入ってもらうかを皆で協議して決めていきます。(記入の事例、4人家族が避難、家屋全壊で長期なる体育館へ、バス旅行の30名が避難した、外国人旅行者が7名避難とかで短期滞在者は3階教室へ、救援物資等入荷したがどこに保管するか、配布方法等の記入表示はとかで・・・)

中味3時間半の協議であったが、今まで自分の頭にある災害時の対処法より思いもよらない事例が多くありました。日常、皆さんがこんなにいるんな事柄を抱えて生活をしてい





ることをも知ることができました。何分にも久し振りの協議で初めはなかなかついていかれず、グループのブレーキで皆さんに負担をかけた？

・訓練中に自分のところで発生したら・・・大口西小学校が避難指定場所になり、校区内4地区で総軒数は約2400軒で約6000名が住んでいます。

災害時で20%の人、約1200名が避難してきたと考える・・・どうなるかなと不安になります。が、まずは地区、区長を始め地区防災会と連携を持ち、事前協議が必要になるかと思えます。

今後は、各市町でこのようなHUG（ハグ）を購入して、校区内で自主防災会を中心に実施訓練が必要ではないかとの思いであります。



## 机上のHUG講習を体験して

犬山支部 飯田 榮子

今回はじめて体験した避難所運営ゲーム（HUG）は、机上での仮想ゲームといえども考えさせられることが多く、グループみんなで真剣に取り組めた講習会となりました。

まず初めに今回の地震災害の概要を聞き、これから開設される避難所を、いかに自分達の判断で的確に運営していくかという訓練のようなものでした。

避難住民や支援物資など、さまざまな状況が書いてある250枚のカードを読みあげて、それぞれの内容に適した対応を受け付けでしていかなければなりません。病人や高齢者、乳幼児や障害のある方、また外国人や観光でこの町に来ている人など、実にいろいろな人たちが避難所にやってきます。支援物資の受け入れやペットの問題、車で避難してきた人への対応など、その他にも雑多な事例が多くあり、戸惑いとハプニングの連続でした。

部屋割り（避難場所作り）は、一度指定したら後から変更はできにくいので特に神経を使います。ゲームが進むにつれ、これがもしも本当に被災をした時ならと、恐怖を感じるほどの緊張を覚えました。ゲームが終わり他のグループの意見を聞くと、自分たちには気づかなかった配慮もあるのだと感じることもあり考えさせられました。

自治体・町内会などが絶えず災害訓練を行っていくことが大切だと改めて思いました。



## 5 一宮市リバーサイドフェスティバルに参加して

いちのみや支部 岩田 和之

ゴールデンウィークの前では、肌寒さを覚える寒い日もあって、当日の天候を心配しながら準備をしていましたが、5月3日から5日の138タワーパークでの恒例のリバーサイドフェスティバルでは、連日の快晴で人出も大変多く、例年になく有効的なイベントが出来ました。

今年は、防災クイズ、塗り絵、非常持ち出し品ゲームを来場者に体験して頂きました。景品が貰えるという事を聞いてテント内に興味をもってやって来られる方を沢山誘導し、苦心して制作した展示パネルをひと目でも見てもらえるように計画しました。例えば防災クイズは問題を読んで直ぐにわかる問題を6問作りました。しかも、ふりがなもあえて付けず、家族皆で相談しながら解くという設定をしました。家族ぐるみで回答をしている光景を数多く見かけました。なかなか好評で、クイズは予想より早く終了しました。その後は、愛知県の防災イメージキャラクターである、防災ナマズンの塗り絵に切り替え第2回戦を開始。塗り絵も子供が主体になるので、その完成を待つ間に親御さんには非常持ち出し品ゲームをしてもらいました。3種類の催しの結果、ブースに来られた人数も延べにして3000人を越したのではないかと感じています。そのおかげもあって、老若男女満遍なく啓蒙啓発が出来たかと思えます。

我々はこのように事で安堵をしている場合ではなく、大災害が起きた時に被災が少なかった、もしくは被害が無かったと安堵できるよう、まだまだ周知をし続けなければならないと思います。それを実感したのはクイズ第6問で我々の活動として家具固定や火災警報器取り付け支援をしていることを、回答する家族の殆どが『へえ～。こういう事しているのだ。』とか『知らなかった。』との声でした。いかに、すべての市民にまで伝えられるかと言うことの難しさを痛感したイベント参加でした。





## 6 東海豪雨オープニングミニエクスカーションに参加して

北名古屋支部 杉浦 緑

東海豪雨から10年、忘れもしない水害、150年から200年に一度見舞われるといわれる悲惨な災害でした。10年後の今を生きている私たちの地域社会の状況を知る良い機会と思い参加しました。

上小田井イオンモール・モゾワンダーイベント広場では、アドバイザーの中部大学の松尾直規教授の説明があり、巡検先へと向かい、第一ポイントの上小田井ポンプ所で概要説明があり、低地区排水を目的とし昭和48年に設置、その後8台増設され、ポンプ排水所として気象環境が変化する現在に備えられました。名師橋から平田橋ルート（鴨田川と新川）交差する鴨田川排水機場大木曾交差点では貯留管の説明を聞き、上小田井駅の駅長さんに当時の東海豪雨を振り返って参加された方の質問等、先生の講評をいただき解散となりました。海部ブロックの久納ご夫妻と今日の話をしながら帰途につきました。



## 7 支部活動紹介

いちのみや支部 河村 文雄

6月13日（日）午前9時半より、いちのみや支部の平成22年度第1回例会を、13名の会員参加で、一宮市消防本部にて行いましたので報告します。

前半、支部長・事務局からの主な連絡事項は次の通りです。

本部・ブロックの状況

- ・会費改定の件、メーリングリスト再構築、イベント・名大防災アカデミー・防災リーダー塾の紹介など

ブロック支援行事に対する参加要請

一宮防災VNW活動

後半は、自主防災会の活性化支援方策についてリーダー会として継続議論を行うために1分間スピーチの練習



参加者から、所属自主防災会の活動状況を報告  
今後の方向性の検討

を行うことで、参加者の状況（地域による凸凹）  
を知ることができました。

全体の討議を通じ、「我々が活躍する姿を、多  
くの人に見てもらふことで、防災への関心を持っ  
てもらい、研修受講・入会者募集につなげる」と  
共に、「地元の自主防災会の活性化につなげる第  
1歩を踏み出す」決意を新たにできたと思います。



## 8 防災よもやま話 No.28 「現代社会の足元を考える」

名古屋大学大学院教授 福和 伸夫

A P L Aの皆さん、こんにちは。閉そく感漂う中、年度が新しくなり、新政権も発足して、何か社会が変化するかもしれないとちょっとだけ期待感を持たせる今日この頃です。市民運動の大切さを誰よりも知る新政権ですから、A P L Aを中心とする防災ボランティア活動への目線も変わってくるのが期待されます。さて、今回は、現代社会の足元について考えてみたいと思います。4月25日に開催されたA P L A総会でお示した下の一枚の絵について、今度、A P L A通信に再録するようにとの要望がございましたので、この一枚について少し補足をしようと思います。

1. 外力と抵抗力：外力低減（危険地撤退）と抵抗力向上（耐震化・維持管理・対応力）
2. 地震活動期と気候温暖化：地震の連動、気候変動と複合災害
3. 低平地の土地利用：揺れ・液状化・堤防&埋立地沈下・浸水
4. 人口の偏在：人口集中と過疎、インナーシティ問題と限界集落
5. 構造物規模の立平面拡大：高層階の揺れ・高層難民&避難・同時被災者増大
6. 高機能・高密度社会：ライフライン・電子情報への過度の依存、脆弱性と波及
7. 人口減少・少子高齢化・核家族：税負担の世代間公平性、災害弱者、災害伝承
8. 地域社会：災害認知社会、地域共同体、市民参加、絆、自助・共助・公助
9. 企業社会：分業と中央集約⇒脆弱性、無関心&ただ乗り、事業継続
10. 行政：縦割、自己防衛意識、創意工夫不足、情報非公開、小災害減少と体験不足
11. 国民：心技体の力&生きる知恵、当事者意識、無関心無責任、楽観と諦め、行政への依頼心、資産家の責任感、多様な人生観、市民参画意識
12. 専門家：細分化、危機認識不足と過信、倫理観・責任感低下、学力・技術力低下
13. 国民と専門家：双方向情報伝達、良質かつ適正量の情報、市民参加による決定
14. 個人資産と国家債務：税配分、防災水準と経済性、最低限の社会基盤維持
15. 既存不適格物の放置：リスク評価、社会的影響の開示、診断技術・改修技術
16. 住宅耐震化と室内安全：備えないことが恥ずかしいと思う社会、行動の誘発法
17. 豊かさや安心：影響・密集度と安全レベル、基本法、技術と安全性、倫理感

**現代社会に生きる人間の責務は  
次世代に迷惑をかけないこと！**

私たちは、世界でも有数の豊かな国に住んでいます。ですが、豊かな社会になる過程で、大事なことを忘れ、社会が災害に脆くなったようにも感じます。今後、大きな地震災害





を確実に迎えることが分かっている中、私たちの目の前には、解決が容易でない課題が山積しているように思います。これらの課題を一つずつ克服し、予見できる災害被害を減じなければ、この豊かな社会の持続は難しいと感じます。「生」あるものの基本は、種を存続することにあります。現代社会に生きる我々の最も重要な責務は、次の世代の人たちに対して迷惑をかけることなく、今の豊かな社会をきちんと引き継ぐことにあると感じています。そのためには、現代を生きる個々人が、当事者意識をもって、その時をイメージする力をつけ、自分の家の被害を出さないように備えをすると共に、大事な子供たちの生きる力を育む努力をしなければなりません。これを実現するには、伝え手の力がとても大きいと思います。APLAの皆さんは、防災リーダーとして、伝え手の中心を支えてくださっています。ぜひ、よろしく願いいたします。

それでは以下に、上の一枚の絵に示した各項目について、若干の補足をさせていただきます。

1. 外力と抵抗力：外力低減（危険地撤退）と抵抗力向上（耐震化・維持管理・対応力）  
地震で被害を出すかどうかは、地震により社会に作用する外力と、私たち社会が持っている抵抗力のどちらが強いかで決まります。外力を減らすには、危険な地域から撤退すれば良く、抵抗力を増すには、建物であれば、建物を耐震化して強くしたり、建物の維持管理をしっかりしたり、さらには多少の被害があっても社会として応急対応力・回復力をつけておけば、社会のダメージは小さくなります。問題は、今の社会が外力の大きいところに拡大し、都市社会の高機能化・高密度化によって抵抗力が落ちていることです。これを少しでも改善する努力をすることが必要です。
2. 地震活動期と気候温暖化：地震の連動、気候変動と複合災害  
皆さまご存じのように、1995年兵庫県南部地震をきっかけに、西日本は地震の活動期に入ったと言われていています。たしかに、この10年間、とても沢山の被害地震が発生しています。今後、数十年以内には確実に南海トラフで巨大地震が発生し、内陸でも幾つかの活断層が動くだろうといわれています。これらの地震の連動の仕方によっては大変なことになりそうです。一方で、地球の温暖化によって、気象災害の危険度も増しています。万一、大きな地震で堤防などが崩れ、そこに大型台風がやってきたらどうなるでしょうか？ 日本一海拔ゼロメートル地帯が広い当地です。複数の地震が続発する複合災害や、地震と風水害との複合災害などを見据えた対策が必要だと感じられます。
3. 低平地の土地利用：揺れ・液状化・堤防&埋立地沈下・浸水  
名古屋市が誕生した1889年には名古屋市の人口は16万人弱、市域は洪積台地の熱田台地の上にとどまっていた。これに対し、現在の市域は堀川の西、熱田神宮の南に広がる低地に拡大しています。これらの地域は地震の時には揺れが強く、液状化もします。揺れや液状化によって、堤防が被害を受けたり、地盤が沈下したり、岸壁が移動したり、さらには津波による被害も懸念されます。また、50年前に経験した伊勢



湾台風からも分かるように、風水害による危険度も高い地域です。市域が低地に広がったことによる外力の増大を意識し、抵抗力を増していくことが必要だと思います。また同時に、人口減少時代を迎える中で、より安全な地域へと撤収し、コンパクトシティを作っていくことも必要ではないでしょうか。

#### 4. 人口の偏在：人口集中と過疎、インナーシティ問題と限界集落

私たちの国の人口は、今から400年前の関ヶ原の戦いの時期には今の10分の1程度の千数百万人、江戸末期は今の4分の1の三千万人程度でした。この時期には、日本全国に散らばって平均的に人が居住していたようです。明治以降、近代化の過程の中で、都市に人を集め殖産興業を図ってきました。その結果、三大都市圏に人が集中することになりました。一方で、中山間地では人口の過疎化が進みました。その結果、大都市ではインナーシティ問題が、過疎地では限界集落問題が発生しています。このような人口の偏在は、社会の災害脆弱性を増します。食料自給率が悪化しているわが国では、再度、地方にUターンし、農業生産力を回復するとともに、全国に自律分散型の中規模都市を分散配置することが必要だと思われます。

#### 5. 構造物規模の立平面拡大：高層階の揺れ・高層難民&避難・同時被災者増大

建築・土木技術の進展によって、構造物の規模が高さ方向、深さ方向、そして平面方向に拡大しています。一つの建築物に1万人以上収容する建築物も珍しくありません。このような建築物がひとたび被災するとその犠牲者は極めて多くなります。また、高層ビルの高層階の揺れは地面の揺れとは大きく異なり、エレベーターが無ければ縦移動も困難になります。その結果、高層難民問題や避難者問題が発生します。本来、大規模な建築物は、被災影響度が大きいので、耐震性の割り増しがあることが好ましいと思いますが、わが国では最適基準の建築基準法を満足すれば良いことになっています。このため重要度の高い建物も普通の建物と同等の安全性しかありません。これを是正するためには、本来の建築の在り方を規定した建築基本法を制定し、個々人が建築物の安全性を考える社会を取り戻していくことが必要になります。

#### 6. 高機能・高密度社会：ライフライン・電子情報への過度の依存、脆弱性と波及

人口が集中する都市では、高機能で、相互依存性の高い高密度社会を形成しています。高速道路・高速鉄道による横移動、エレベーターによる縦移動、電気・ガス・上下水などのライフライン、電話・インターネットなどの通信インフラなどに強く依存しています。そしてどれか一つが途絶するとその影響は連鎖的に波及していきます。そして、効率性を高めるために、様々なインフラが中央集約型になっています。独立性の高い自律分散型の社会と比べ、このような相互依存型・中央集約型の社会は、災害に対して脆弱性の大きな社会とも言えます。エコの時代を活用して、各家庭で電力生産ができるような自律分散型の社会を作り、省エネにも貢献できると良いと思います。

#### 7. 人口減少・少子高齢化・核家族：災害弱者、災害伝承、個人資産と国家債務、税負担の世代間公平性



一人の女性が一生に産む子供の数を示す合計特殊出生率が、昨年は1.37人だったそうです。この結果、私たちの国はとうとう人口減少時代を迎えてしまいました。65年前の東南海地震の時代の人口分布はピラミッド型でしたが、次の地震のときには逆ピラミッド型の人口分布になっているでしょう。災害に弱い年代の人が急増し、復旧・復興の担い手である働き手の世代が減少するため、社会の回復力が相当に減退してしまいます。核家族化により、祖父母の世代が、孫の世代にかつての災害経験を伝承したり、生きる知恵を伝えたりする機会も激減しています。現在、我が国の債務は1000兆円にも届こうとしています。一方で、個人資産総額は1500兆円程度あるようです。このアンバランスは問題です。今は、現役世代が次の世代に借金して豊かな生活をエンジョイしているとも言えます。次世代は、現世代が残した多大の債務を抱える中、大きな災害に見舞われることとなります。このような税負担の世代間不公平は早く是正する必要があります。そのためにも、私たちは税負担のあり方を見直し、少しでも債務を減らすように努力をすることが必要だと思えます。

8. 地域社会：災害認知社会、地域共同体、市民参加、絆、自助・共助・公助

かつての日本は、農耕社会特有の地域共同体としての地域コミュニティの力を持つとともに、自然災害が身近であったこともあり、災害認知社会を形成していたと言えます。これに比べ、現代社会は、人のつながりが弱くなり地域の力が減退してきました。さらに、人工環境の中で暮らしているため災害に対する感覚が鈍っているように感じます。また、行政に対する依頼心が強く、自らの命は自らが守る自助や、地域の中で互いに助け合おうとする共助の意識に欠けているようです。ですが、一方で、市民参加意識が芽生え、絆を大切にしたいと考える人も増えているようです。多様な人生観もった市民が増えつつある中、新たな市民感覚が現代版の地域共同・災害認知社会を形成していくことが期待されています。

9. 企業社会：分業と中央集約 脆弱性、無関心&ただ乗り、事業継続

利益追求を至上命題とする企業社会では、コスト削減と効率化のため、分業と中央集約を進めています。ですが、過度な分業化や中央集約化、在庫削減などは、災害時のリダンダンシー（冗長性）を低下させます。新潟県中越沖地震で、サプライチェーンの中の1社が損壊したことで日本中の自動車工場が操業停止になった事例が思い出されます。地震活動期の中、企業の事業継続のために何が必要かを考えることが必要だと思えます。普段接することの少ない大規模災害については、どうしても関心が薄れ、行政へのただ乗り意識が芽生えます。ですが、ひとたび大きな損害を受ければ、企業の存立が危ぶまれます。会社と自宅の備えを促進しておくことが、得意先や社員から最も信頼を得ることだという意識を形成することが望まれます。

10. 行政：縦割、自己防衛意識、創意工夫不足、情報非公開、小災害減少と体験不足

行政組織は、平時は役割を分担して仕事をする中で業務の効率化を図っています。ですが、一方で、縦割りによる硬直化という弊害もあります。行政が陥りがちになる





組織の自己防衛意識、情報の非公開、自己改革意識や創意工夫の不足、などをできるだけ避ける工夫が必要です。また、近年、社会インフラの整備により小さな災害が減少しています。このため、災害を体験したことのある職員が減少しています。このような状況の中、一生で一度遭遇するかどうかの大災害に対して、的確に対処できるように訓練をしておくことはなかなか大変です。

11. 国民：心技体&生きる知恵、当事者意識、無関心・無責任、楽観と諦め、行政への依頼心

豊かな社会になり、自然との接点が減った都市社会では、個々人の心・技・体の力が弱まっています。かつての日本人が持っていた様々な生きるための知恵が核家族社会の中で次世代に引き継がれていません。自然の怖さを実感する機会が減ったため、災害に対する当事者意識が弱まっています。また、社会が豊かになり、行政サービスが行きとどき、行政への依頼心が強くなったため、多くの人々が災害などの問題に無関心・無責任になりつつあります。さらに、「正常化の偏見」で代表されるような楽観と、「どうせ無理だから」という諦めの両極端の考え方を持つ人が増え、災害と正面から向き合って被害軽減のために地道に取り組もうとしている人が少なくなってきました。また、社会をリードする資産家の社会への責任感も減ってきているようです。私たち一人一人が当事者意識を持って安全安心な社会を築いていく役割を担っていることを自覚する必要があるようです。

12. 専門家：細分化、危機認識不足と過信、倫理観・責任感低下、学力・技術力低下

現在、国立大学法人に勤める教員は約10万人です。かつてと比べ、学問の先端化とともに、細分化が進み、俯瞰的に物事を見る研究者が減ってきているように感じます。そのため、狭い研究の世界の中での過信が進む一方で、今の危機に対しての認識が十分でない研究者も増えているように思います。バーチャルな世界での研究が嵩じると、社会に対する倫理観や責任感が低下しがちになります。これは、私たちが常に気をつけなければいけないことです。さらに、最近では、過度な評価主義や人員削減、社会が研究者を芸者的に使う傾向が強まってきているため、研究や教育に費やす時間が激減し、研究者や技術者の学力が低下しているようにも思います。会議だらけで、実際に仕事をしている人の割合が減っている現状は日本の社会共通の問題点のように感じます。また、国民と専門家との情報伝達の仕方にも問題があるようです。これまでは、専門家側が一方的に国民に情報提供をすることが多かったようです。今後は、双方向で情報を伝達すると共に、その情報も良質かつ適正なものである必要があると思います。その上で、市民参加による意思決定を国民と専門家が協働して行う必要があると思います。

13. 既存不適格物の放置と防災水準：社会的影響の開示、診断・改修技術、防災水準と経済性

我が国には膨大な数の既存不適格構造物が存在しています。一般に、重要な社会イン

フラほど、早期に整備します。このため、社会的影響度の高いものほど早く作られています。ですが、初期に作られたものは、現在のものに比べれば耐震安全度は一般に低いと思われます。東京の中心を縦横に走っている高速道路や鉄道、地下鉄などを見ると、郊外の新しいものと比べ心配な感じがすると思います。初期に作られた発電所や工場、高層ビルなども同様の状況にあります。このような広義の既存不適格構造物を放置しているのが現状のように思います。コンクリートから人の時代へ、と言う前に、社会を安寧に保ち、大災害で破たんしない程度の防災水準を満たすように改修することが必要です。そのためには、これら重要な既存不適格物が損壊した場合の社会的影響度を開示し、診断・改修技術などを早々に確立することが必要です。

14. 住宅耐震化と室内安全：備えないことが恥ずかしいと思う社会、行動の誘発法

既存不適格構造物の一つである旧耐震基準の建築物の耐震化は遅々として進みません。また、家具の固定もなかなか進みません。建物の耐震化や家具固定を進めなければ、本当に大変なことになってしまいます。自らが備えなければ恥ずかしいと思うような社会に早急に変え、皆で説得しあいつつ、互いに防災行動を誘発する効果的な方法を作っていく必要があります。そのためにも、APLAの皆さんが率先市民として、防災行動の見本を示し、多くの方々をリードしていただきたいと思います。

15. 人材育成：防災教育、家庭・地域・職場教育、伝え手、教材

かつては、様々な知恵が、家庭や地域で、お年寄りから子供へと伝承されてきました。しかし、現在は、核家族化が進み、地域での絆が減ってきているため、学校での教育に頼りすぎる時代となってしまいました。ですが、どうしても学校の教育は教科学習を中心とした知識の修得に中心になりがちになります。生きるための様々な知恵を、体験を通して学ぶには、家庭や地域の中での教育が鍵を握ります。その際に、良い教材や、知恵の伝え手の役割が大きいと思います。今は、修得する知識が膨大で理解力は増していますが、残念ながらそれを納得し、自分の問題だとして会得することが不得手になったように思います。今後、地域や家庭での教育の力を増やすことが望まれます。



ここに示したことは、いずれも現代社会に生きる我々が、次の世代に社会を引き継ぐ前に少しでも改善しておくことが必要な課題だと思います。私たち現代人は自己反省が苦手で、問題を先送りにしがちです。私たちは、今世紀前半に国民総生産の数割、国家予算の数倍の地震被害を蒙ることを知っています。この被害を出せば我が国



社会が破たんする可能性も大きいと思われまます。減災への強い思いをお持ちの皆さまの力が頼りです。少しでも良い方向に社会を改善していきましょう。

その際に役に立つと思う道具を作ってみました。前ページのような画面の中で、自分の住んでいる場所の揺れを体感することができると思います。

一度、<http://sim.sharaku.nuac.nagoya-u.ac.jp/EVEREST/>をお試しく下さい。

## 8 お知らせ・掲示板

### 愛知県・一宮市総合防災訓練

日時 平成22年8月29日(日) 8:30 ~ 11:30

場所 一宮千秋総合運動場(一宮市千秋町佐野)

防災啓発をご支援くださる方は

伊藤代表(090-4794-8863)へ

7月15日までにご連絡ください。

### 防災セミナー

日時 平成22年9月26日(日) 午後から

場所 清須市民センター

東海豪雨10周年を機に、

群馬大学片田教授のご講演やパネル討論が予定されています。

開催時間や申し込み方法については、後日ご連絡します。

### 名古屋大学防災アカデミー

第61回「東海豪雨から10年 課題は何だったのか  
何が克服されたのか そして何がなお課題か」

講師 辻本哲郎(名古屋大学大学院工学研究科教授)

日時 平成22年7月21日(水) 18:00 ~ 19:30

場所 名大環境総合館1階 レクチャーホール

**編集後記** 新しい年度が始まり、皆様もそれぞれの支部活動に頑張っておられることと思います。このAPLA通信は年4回の発行で、次回は9月25日号です。会員の皆様を結ぶ広報紙として、共に成長していきたいと願っています。日頃の活動内容やご意見・ご要望などをお寄せください。お待ちしております。 広報担当 森 千代子